
貧乏不幸青年と3人の幸運兄弟

arufonsu

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

貧乏不幸青年と3人の幸運兄弟

【Nコード】

N77700

【作者名】

arufonsu

【あらすじ】

青年と3人の兄弟の物語。兄弟は今回は出てきませんので、最初とはとことん暗くかわいそうな青年を書きます。はじめての投稿なので感想をお願いします。

プロローグ

息を大きくゆっくり吐き、気持ちを落ち着ける。そうすると周りの雑音が聞こえなくなり一気に集中力が上がる。

「1メートル下がって・・・位置について。」
・・・・・・・・パツン・・・・・・・・ワーーーーー

乾いた火薬音が競技場に響き渡る。

その瞬間自動的に低いスタンディングスタートから前へと体が動く、そこから自分の気持ちを落ち着けるようになるべく大きなフォームを意識しながら前へセパレートゾーン約100mを走り抜ける。

次のオープンレーン入る手前、他の選手の様子を見ながら、なるべくあせらずスムーズに足を進める。手前のレーンを走っている選手が自分の前を走り抜ける、でも自分はそれについていかず周りの流れにまかせる。あと720メートルぐらいあるのだ、焦っても仕方ない。思ったほど流されずトップから5番目の位置につけた。そうしているうちに200mを通過する。コーナでは何時でも抜け出せるようにアウトレーンを走る。ラスト420mそこから一気に足のギアを上げるつもりだ、そう言われた。

そしてラスト420mに差し掛かる。しかし自分の体は反応しな

かった次の瞬間、ペースがいきなり上がる。しまったワテンポ遅れた。そこから自分も足のギアを上げていく、そうして不利なアウトコーナで3人抜く。

焦ってテンポを上げたせいか思ったよりキツイ、だがそれを気づかないフリをして500～600mの間にもう一人抜く、改めて見るとトップとけっこう差がある。10mは無い8mぐらいか。そのままのペースを維持しながらコーナを走り抜ける。

ラスト100mの直線もう限界のはずの足にギアをもう一つ上げるように命令する。あと6mでぬける5・4・3、もう無理だ、あと20mも無い。その間に3mは無理だ、そう思った時、一瞬ペースが落ちた。横から誰かが自分の前をトップの背中を隠す。そのままゴール・・・・・・・・。

腰番号を返した後、タオルで汗を拭きながらスパイクを片手に持ち、更衣室へと足を進める。前に誰かの気配を感じ、頭を上げその人を見る。体が固まりその場に硬直する。次に頭の中で急いで言葉の検索をかける。出てこない・・・言葉に詰まっていると相手の口が開いた。

「先輩今回の試合、何？言い訳聞く。」

ヤバいかなり怒ってる、どうしよう何か言わなきゃ・・・。

「ごめん、集中力が足りなかった。次は集中するから。」

「うそ。前半は、集中できていた300mあたりから集中できてイナイ。途中から集中が切れる時は何か悩みある。いってみろ。」

な・・鋭い。彼女の名前は霧野 ユミ、僕のひとつ下の後輩。彼女はいつも無表情だが僕には解るかなりキレている。怖い、でもさっきまではただ怒ってただけだったのに、そうムカつくことを思い出したかのように・・・。

えーっと。

「大丈夫だよ。次はいつも道理やるから。」

「・・・いつも抱え・・・次は期待。」

そう言って歩き出す。霧野が行くのを待ってから、自分も更衣室に入って行く。何か言いたげだったけど・・・まあいいか。

汗を流すためにシャワーを浴びる。水の滴る音を聴きながら、昨日のことを思い出す。僕は1人暮らした。昨日はいつも道理、10時に布団に入ると義理の叔父さんから電話があった。

父が亡くなったらしい。らしい・・・ぱっとしない実感が湧かない2年前まで母さんと二人暮らしだった。そうして高1の春、母さんが死んだ。その時の葬式には、ほとんど人が来なかった。もちろん

父も来なかった。その時、来ていた唯一の父がたの親戚・・・まあ母さんの方の親戚は一人も来なかったけど、その人が言っていた。・
・なんでも世間で言う僕は隠し子だそうだ。そうだ・・・やっぱり、その時も実感が湧かなかった。1度も会ったことの無い父、いや男に興味がなかった。ただ単純に母さんが死んだことが悲しかった。さりげなくその親戚の人、叔父さんが養子を申し込んでくれたが僕は断った。

でも未成年は一人では生きていけないので叔父さんに保護者にはな
って貰った。その時の僕はひどく冷静だった。あらゆる手続き自分で終わらせてバイトを探し、1人で生きていく準備をした。

ハッ・・・またレースに関係ないことを考えていた。僕はシャワー
を冷水に変え、頭を冷やしシャワー室を出た。ジャージに着替えた
後、更衣室を出た。

プロローグ（後書き）

いろいろ感想いただけると嬉しいです。

1話

鞆から、おもむろにスポーツドリンクお取り出して飲むとした。
アッ……。中身にゴミが入っている。まただ……。

僕は極端に人気が無い、人付き合いが下手くそなのか、どうか解らないが陸上部の中では最悪でありよろしくない。時たまこうして嫌がらせを受ける。慣れたつもりだったけど、なんか悲しい。今思えば学校で話しかけてくる人、3人くらいしかないな。

「ねえ、×××。先生呼んでる。」

急に話しかけられビックとするとそこに安藤 サヤカがいた。この人は俗に言う幼馴染で昔は一緒にたくさん遊んでいたが小学5年の時、僕がイジメを受けた時からほとんど接点が無い、高校では時たま喋ることがあるくらい、喋ると言っても間接的な事が多い先生が呼んでいる時など。そのままか。

「うん。」

と小さな声で答えて急いで先生のところに向かう。

「×××。親御さんが来てるぞ、今日は葬式だって、なぜ行かなかった。今から行って来い。」

その言葉を聞いて思考が一瞬フリーズした。とたんにナゼ、ドウシテという疑問が頭の中に回っていたがすぐに切り替えて返事を返した。

「はい。」

門の所まで行くと陸上関係者いや普通の人にも見えない。ものすごく目立っている黒服の叔父さんがいた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7770o/>

貧乏不幸青年と3人の幸運兄弟

2010年11月12日14時42分発行